

小山栄三先生の御逝去を悼む

広研部長

平井 隆太郎

小山先生に最後にお目に掛ったのは57年夏の広研30周年記念パーティーの席上であった。少しやつてはおられたが、仲々お元気で、近況を何くれと話され、楽しそうにしておられた様子が目に浮かぶようである。華やいだことを何よりも好まれた先生であったから、大盛況裡に終ったパーティーには心から満足されたに違いない。

その1年後の夏、猛暑のためか突然体調を崩され、専売公社病院に入院、気管支肺炎との診断で加療されたが回復せず、58年8月16日永眠された。享年83歳とうかがっている。

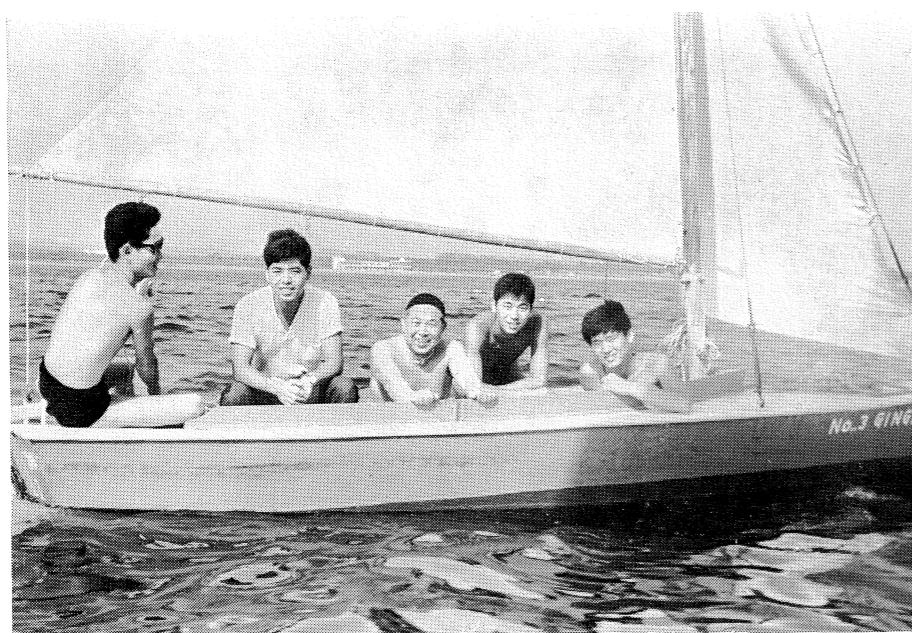
先生は東京大学文学部社会学科、法学部政治学科を卒業、直ちに新設の新聞研究室の研究員として草創期のマスコミ学の建設に専念され、同12年立教大学講師、翌13年から16年まで経済学部の教授として勤務された。

戦時中は文部省の人口問題研究所員、企画院調査官等を歴任され、戦後まもなく国立世論調査所長に就任、昭和28年には再び本学に戻り、社会学部教授として昭和39年定年退職まで勤務された。

ご令息の観翁氏（劇評家として著名）によれば、先生は生前「自分は間口を括げすぎた」と洩らしておられたとのことである。確かに先生の研究分野は人口学、広告学、世論調査、新聞学と多岐に亘っていたが、それぞれについて一流の研究者であるという異能の人であった。また、世論研究との関係で数学にも造詣が深かったと聞いている。さらにつけ加えるならば、先生は柔道の達人でもあった。

このような先生が広研の創立当初から部長として指導助言されたことは、広研にとって誠に幸運なことであったし、先生もまた広研には強い愛着を抱かれていたようである。館山のキャンプストアは都合のつく限り訪問され、助言を惜しまれなかつたし、部員のコンパには生来の飲酒不感症であったにも拘らず、喜んで出席されていたと思う。なくなった藤井寛君のような酒豪部員の相手はいうまでもなく、小生の役廻りということになっていた。今となっては懐かしい想い出である。

心から先生のご冥福をお祈り申し上げる次第です。



小山教授の思い出

広研初代委員長

染野 郁郎

立教大学文化会広告研究会が発足30年を迎えた。30年史に当会の顧問であられた小山教授の思い出を綴ってみた。

教授は、東京帝大社会学科政治学科を出られ、新聞関係の御仕事をなされていたが、戦後縁あって立教大学に奉職された。

当広研としては、新聞学界の権威であられる教授に、大学での講義、学界活動で多忙な中を、無報酬で当広研の基礎固めの時期に御指導いただいた。

教授の新聞学会に於ける御活躍は、その論文にみる通り、権威あるもので、特に新聞のコストを支える広告＝

広告の新聞に占める倫理のあり方については造詣が深かったです。学生に教授されるこれら及び当広研に対しての心温まるアドバイスは、その基本が「愛」であった。

晩年は現OB会長勝呂哲郎氏が懇親されておった。教授の学界に於ける御活躍は学会史に永く刻まれて後世にのこっております。

立教大学文化会広告研究会の30年史に、教授の功績を述べて後世に残したい思いで、この文章をしたためました。

昭和60年新緑の頃

小山先生を惜む

広研OB会会长

勝呂 哲郎

代官山の高台、バス通りの渋谷電話局を右に、小川軒の横道を少し入った、閑静なお住まいが、小山教授のお宅でした。

私は、学校卒業後、度々、遊びに行きました。先生は国内はもとより海外にも、学会、講演などで、よく出張されました。先生は、書斎の椅子にもたれ、パイプタバコをくわえながら、良く来てくれましたね、コーヒーは好きですか、と云われ、サイホンでとてもよい香りのコーヒーを、ご馳走になりました。

仕事はうまくいっていますか？ 今、君の業界は、景気はどうですか？ 又、学校の友達（広研の友達）に会うことがありますか？ と云った近況についての言葉が私に温かく掛けて下さるのが決まりでした。傍に、静かに、奥様が、微笑み、相づちをうたれ、そんな光景、昨日の様な気がします。そんな、先生が、私にとって忘れる事が出来ない良い思い出です。

広研設立以来、先生には、言葉に表現出来ない程、大変御世話になり、御指導も受けました。私事ですが、先生御夫妻には、二十年前、御仲人もお願いし、親戚同様に、御交情に預かり、本当に感謝しております。

先生は、御病氣で倒れる寸前まで、原稿を書きつづけておりました。表題は聞きませんでしたが、駅弁の社会史の様な内容で、先生独特の表現で、面白く、わかり易く、しかもとても興味深く書かれたものでした。一日も早く、本になるといいですねと、先生に申し上げましたら、先生も笑いながらうなずいておられました。

そんな御元気だった先生が、入院、そして突然に他界されてしまいました。広研30年史記念誌出版を楽しみにされておられました。本当に残念の一言に尽きるのです。学荘院智光栄居士。ここに私は、先生の墓前に向って、お詫びを申し上げると共に、御冥福をお祈り申し上げます。

合掌

藤井寛、前OB会長への悼惜

昭和33年卒

戸田 茂

早いもので、藤井 寛、前OB会長が、逝去して、4年が過ぎ去ってしまったが、未だ、彼の死が信じ難い気持ちで一杯である。肝硬変による食道静脈瘤の破裂が、直接の死因となり、享年46才の若さで、この世を去ってしまったことは、御遺族の皆様方にとっては、悔んでも悔みきれないものがあったことと思われる。私共、友人、広研関係者にとっても、その衝撃は大きく、誠に惜しい人を失い、残念なことと悔まれてならない。

彼は、昭和33年に立教大学を、そして、広告研究会を卒業すると同時に、学生の頃から、一人前のデザイナーとして稼いでいたのを土台にして、デザイン会社を設立し、後に家業の仕事（ガス厨房器具）を継ぐまで、若き社長として活躍していた。当時、広研OB会も発足間もなく、歴史も浅く、会員の大半が、社会に出て、サラリーマン生活一、二年のものばかりで、時間的に余裕がないため、いつの間にか、彼が会の面倒をみるようになり、亡くなるまでの20余年間に亘り、OB会長として尽力してきた。永い間、その責を十分に果してきたことに對し、「ほんとうに、御苦労様でした」と言いたい。毎年の勞に敬意を表すると共に、それに十分に応えることが出来なかつたことは、誠に慚愧に耐えない。OB会の方は、彼が、しっかりやっているからと思い勝ちになり、今迄、積極的に協力しなかつたことを深く反省している。この思いは、私ばかりでなく、多くのOB諸氏も同じ思いをしているのではないかと思う。

図らずも、57年が広研創立30周年に当り、彼も生前には、何か記念イベントをやりたいと念願して居り、「何か、良いアイディアを出してくれ、また、皆とも相談してくれ」と、よく言っていた。幸いにも、勝呂哲郎新OB会長を中心に、多くのOB諸氏の協力、尽力で、57年8月28日の、東京プリンスホテルでの記念祝会も、多数の出席者を得て盛大に催すことが出来た。これも、彼が永年に亘り、途絶えさせることなく、OB会を掌握してきた賜と思う。彼も、まだ元気に、30周年を迎えて、皆と共に祝う気でいたところと思うにつけ、今迄、孤軍奮闘してきた彼に、ひと目なりとみせてやりたかったという思いが、ますます募るばかりである。

また、この記念誌に、彼の追悼文が掲載されようとは思ってもみなかつたことであり、況や、私が書く羽目にならうとは夢にも思わなかつたことである。

「告別」

57年3月、体調の不調から、駒沢の国立病院に入院し、検査の結果、肝硬変が相当に進行し、食道に静脈瘤が数ヶ所出来ているということで、そのまま入院加療することになった。7月末に、一応退院し自宅で静養しながら回復を期していたが、かねてから念願していた建築中の、彼の経営する（株）ヤシマの新社屋が完成し、9月1日より、その新社屋で営業開始という前日の8月31日に、懸念されていた静脈瘤が破裂し、吐血、直ちに救急車で再入院、そして緊急手術となつた。

その手術に際しては、多量の新鮮な血液を必要とするところで、多方面に連絡をとり多くの方々が、夜間にも拘らず、続々と病院に駆けつけてくれた。勿論、広研のOB、学生も、多数詰めかけ、一時は、病院のロビーも溢れんばかりとなつた。献血に、また、心配の余り続々と詰めかける人の多さに、病院側も驚くばかりで、延べ百人を優に越えていた。これも、彼の日頃の人付合いの良さ、面倒見の良さ、人柄の良さの所以だと思う。

しかし、御家族をはじめ、多くの人々の待機する中での、6時間を越す大手術も、一応成功したかにみえたが、肝心の肝機能が低下しているため、次第に衰弱し、万全の手当の甲斐もなく、9月9日の朝、遂に帰らぬ人となつてしまつた。

そして、雨の中の通夜、翌日の告別式と、駅からも遠く、天候にも恵まれなかつたにも拘らず多くの方々が、弔問にみえられたのも、生前の彼の人柄が偲ばれた。葬儀に際しては、御遺族の要望で、友人仲間の手で葬送して欲しいとのことで、僭越ながら、私が葬儀委員長となり、勝呂先輩、岡村典男、宮田靖匡、各OBに副委員長になって頂き、多くのOB諸氏、また、当時の永井委員長をはじめとする学生諸君に、骨身惜しまぬ御協力を頂き、お蔭様で無事葬うことが出来た。彼は、立教中学、高校、大学、そして、広研OB会長として、人生の大半

を立教にかかわってきただけに、立教、広研を愛する気持は、人一倍強いものがあった。彼の中学、高校の友人である、玉田氏の指揮で、全員で立教の校歌を唱い、靈前に献歌した。やはり、彼と一緒に、校歌を唱つたことの場面が、次々と思い出され、自然と涙が溢れるのを止めることが出来なかつた。また、告別式では、棺を立教の校旗で被い、広研の学生諸君に担つてもらい出棺したが、奥様をはじめ、御遺族の皆様からは、「彼の葬儀に相応しく、故人も本望であろう」との御言葉を頂き、私共、葬儀に携つたもの一同も、大任が果せたと安堵した次第です。しかし、入院、手術、通夜、告別式と続いた一連の出来事が、未だ、昨日のことのように鮮明に思い出されてならない。今になると、私共が右往左往して、慌て周章していた時、彼は棺の中で、それまで止められていた酒を、やっと解禁されたとばかりに、ニヤニヤしながら、「オマエラ！ 何を、ばたばたしてんだ！」とでも言って、普段の彼らしく、チビリチビリと飲みながら泰然自若としていたのではないだろうかと思うことによつて、幾分たりとも慰めにしている今日此頃である。

「思い出」

彼の死因が肝硬変と言えば、「やはりなー」という答が返つてくる位い、彼の酒好きは有名だった。学生時代から、よく飲んでいたが、当時の広研は、彼ばかりでなく酒好きの同好の士の集りのようなものだった。昭和34年1月発行の、広研会報12号に、彼が「我が人生最悪の4年間の巻」ということで、学生時代の思い出の記を寄稿しているが、その中で彼もいみじくも同じようなことを書いているので、その部分を抜粋してみた。

お酒と言えば当時の広研は、本当に飲んべエばかり揃っていましたネ、まったく。

部屋で何んとなくガヤガヤ騒いで、さあ帰ろうといふ頃は、もう薄暮時、池袋の街を歩いていると通りがかりに、ブーンとヤキトリなるものユニオイがしてくる、ともういけませんでしたネ、誰が言ひだすのでもないのですが、ゾロゾロのれんをくぐってしまう有様、良く飲みましたね。何か会合があると必ず一杯いこー！、部員会ま



で飲み屋でやつたような記憶がありますヨ。

彼が言う通り、あの頃は、機会をみつけでは、よく飲んでいた。彼の酒は、御存知のように陽気な酒だった。日頃、無口で口数の少い彼が、一杯飲むと、俄然、張り出しがいい、踊り出す賑かな酒だった。だから、初対面の人は、素面の時と、アルコールの入った時の落差の大きさに驚いたことゝ思う。私も、最初、広研に入部した時（私は2年生の時入部した。）気難しそうな顔した上級生がいるなと思ったのが第一印象である。口を初めて開いたのは、私が入部間もなく、四大学広告団体連盟（早、慶、明、立）が発足し、三田の慶應で、その発会式があり、その懇親会の席で、たまたま隣り合わせになつたのが、きっかけだった。なにしろ、私は、彼を上級生だと思っていたので、丁重にしていたのだが、話していくうちに、同学年だと判り、また、見かけによらず、他人の話をよくきく、親切な、思いやりのある、優しい奴だなと思った。

その時、席上に出されたビールを一口飲んで、元来下戸の私は、まっ赤になってしまったが、彼は、隣にいて、世間にこんな酒の弱い奴がいるのかなと思ったそうだ。それからも「赤いのを通り越して、紫色になったのには驚いた」と、よくからかわれた。そう言わると、大概、私も「飲む席では、必ず、俺の隣りに来て、飲めない奴を助けてやるてエー顔して、ジャンジャン飲めて大分得をしたではないか」と言い返すことにしていた。

それ以来、飲む会合では、大概一緒に、二次会、三次会と行くうちに、いつの間にか、二人だけになってしまふことが多かった。

よく他人から「藤井のような飲んべーと二次会、三次会と付き合っていられるな」と感心され、半ば呆れられたが、私としては飲み過ぎれば眠くなり、彼が飲んでいる横で「コックリ」としているうちに、酔も醒め、その頃には彼の方が出来上がって居り、最後は、どちらかといふと、私の方が介抱役に回ることの方が多いかったようだ。

あの頃は、現在も広研の部長として御面倒をみて頂いている、平井隆太郎先生も、広研の会合によく御出席頂き、菅頭、金沢両先輩、藤井、田中等の酒豪に伍して遅くまで、お付合い下さり、池袋、新宿と、頭の痛くなるような酒、焼酎を飲み歩いていたのが思い出される。

私が彼と出会った頃は、もう既に、飲酒のために腹が出て居り、立教高校時代バスケット部のレギュラー選手だったのが自慢だったが、その体型から信じ難い顔すると、学校の帰途、東大久保の彼の自宅に連れて行かれ、バスケット部のユニホーム姿のスマートだった時の写真をみせ「どうだ納得したか!」と言い、半信半疑で、彼の顔を見詰めるのを、ニヤニヤしながら悦に入っているのを、私ばかりでなく、かなりの人が経験しているはずである。その時「これは、旦那だけにみせるのだから」と前置きしてみせられるのが、北海道の砂金が採れる秘密の場所が描かれた秘図なる代物と、砂金を匿うための古ぼけた椀である。「これで、一攫千金を摑みに行くつもりだが、旦那も一枚のらないか?」と言っていたが、今では、その夢も見果ぬ夢となってしまった。

思えば、彼とはいろいろなことがあった。大学四年生

の時、彼と田中敏之氏と私の三人で、館山のキャンプストアに自転車に乗って訪ねようということになり、池袋の自転車屋で学生証を担保に、金500円という大枚をはたいて、サイクリング車を借り出し、その夜十時に東京を出発した。当初の計算では明朝八時頃には到着する予定で走り出したが、案に相違して、翌日の夕方に、やっとの思いで辿り着いた。このことも先の昔の会報に彼が次のように書いているのを読んで懐しく思った。

今から考えると魔がさしたとでも言うんでしょうね、館山迄自転車で行ったのですよ。同期のT・T君、T・Sと三人で出掛けたのですがネ、両国まで来た時にはもう嫌になったのですから先はひどかった。それでも木更津迄は舗装道路ですから、まだ尻の痛いのも我慢して鼻唄まじりのドライブだったので。その快適さも舗装が無くなつてからの旅行は悲惨なものでした。口をきくと舌を噛むので皆黙々として帰るに帰れない運命を呪いながら進みました。途中、空腹に耐えかねて貧血を起して動けなくなる始末(持参の弁当は出発してから数時間の中に空っぽ)館山に着いた時の格好は少くとも僕のお嫁さんには見せたくないと思いましたネ。エッ帰りはどうしたって? 自転車ごと船に乗せ帰ってきましたヨ、男阿呆にして車船に登るの図ですネエいやまったく……

(あの頃は、東京の竹芝桟橋、館山間を夏の間、東海汽船が一日一往復していた。また当時は、自動車も少く、道中殆んど行き会うことがなかった)

彼などは、キャンプストアでは開店までの店内の飾り付け、ポスター、メニュー等の作成が、主な役目だったので、当時の写真をみると大概、店の前のベンチでゴロゴロしている彼の姿が多くみられる。たまに回ってきた炊事当番の時、本格的なアジのタ、キを食べさせてやると言って、彼が調理したのを食べ大騒ぎしたことがある。それも彼自身が書いたものから引用すると、

アジの刺身で思い出しましたが、私の炊事当番の時、アジの刺身を皆の衆に配ったところ中毒? を起して数人の病人が出て、又寝込まない人でも、皆下痢の為にヒヨロヒヨロになってしまいました。これも申証のないことでした。

と書いているが、当の本人は「日頃から、アルコール

で消毒してあるから」とピンピンして居り、医者が何回も往診にきたにも拘らず、よく営業停止にもならず済んだものだと思う。

キャンプストアについて、当時は文化祭が広研の仕事として大きな比重を占めていた。文化祭の準備で部屋の前で焚火をし、酒を飲みながら、何日も徹夜したが、明け方は十一月初めのことくて寒く、池袋から山手線の始発をまって、暖房の効いた座席に長々と寝そべり、山手線を二、三周し他の乗客から、胡散臭げにみられたこと。

タッカーホールでのクリスマス祝会に、今のドリフターズのようなドタバタコントを、軽音楽部、放送研究会と合同で上演したことがある。企画、演技は、広研は役者が多いからということで担当したが、とてもじゃないが素面では演れないというので、特に彼が飲み過ぎて演技過剰となり、厳粛なるべき祝会をすっかり白けさせたということで、学生部に呼び出され、叱咤を受けたこと等々、当時、彼を筆頭に飲ベエと、宴会用芸人が揃っているのは、学内でも有名だった。

大学を卒業し、社会人になってからも、彼とのいろいろなことが思い出される。

私が就職して間もなく、宿直当番の時、夜中に通用口のベルが喧しくなるので、飛び起きて戸を開けると、彼が、バーのマダムにバケツの氷の中にビール壠を突込んだのと、ツマミの枝豆をもたせて、慰問だといって訪ねてきたのには、驚かされた。その上、彼が酔いつぶれて、会社の机の上に寝込まれ、翌朝、他の社員が出社してくる前に、やっとの思いでタクシーに乗せて送り出し、冷汗をかいたこと。

私が、入社二年目に大阪転勤の辞令が下り、何回も送別会をやってくれたが、ある日、東京のものが、東京の名所も知らないと恥をかくといけないということで、車で、浅草の観音様、湯島天神、靖国神社、二重橋、東京タワー、明治神宮等を一巡してくれたこと。

「冥福を祈る」

等々、思い出は限りない。彼には、いつも他人を思い遣る、優しさがあり、いろいろ馬鹿なこともやったが、それを馬鹿々々しいと言ってしまえばそれまで、他人を楽しませ、自分も、それをみて楽しむというサービス精神と、遊びの心、ユーモアが横溢していた。お蔭様で広研を通じ、彼を知り得たことは、私にとっても夢多き、楽しい学生時代であり、広研生活が送れたと、彼に感謝している。

また、社会に出てからも、非常に冷静に、豊富な知識をもって、物事を判断し、いろいろと教えられることが多かった。今日まで、貴重な教え、楽しい思い出を数多く残させてもらい、私の人生の貴重な糧になったことは間違いない。

当時の広研では、お互いに「旦那、旦那」と呼び交していたが、彼こそは、正しく眞の旦那であり、立派な旦那の風格を身につけていたと思う。敢えて、稚気な振舞をし、茶目氣とユーモアを併せ持つと共に、表に出さない聰明さと、鋭い感覚を秘めた、酸も辛いも十分に弁えた粹人だったと言える。今日のような世の中にあっては、彼のような人物は、特に稀れであり貴重な存在であったと思う。

これからも、まだ長生きしてもらいたい、50代、60代、70代……と歳を経るに従い、更に、旦那に磨きがかかる、年代に応じた風格のある、味の深い旦那になるだろうと期待していただけに、あの若さで、この世を去ってしまったことは、惜しまれてならない。

彼が、永年に亘り広研に携ってきただけに多くの後輩が、何等かの形で、多かれ少なかれ影響を受け、彼の良さである、思い遣りの心、遊びの心、余裕の心等を、引継いできたと思う。今後、更に、藤井精神の良さを酌みとて発展させて欲しいと願っている。

「旦那、ヤバかったよ」と言いつながら、三途の川も無事、渡り了え、今頃は冥土で、好きな酒を、思う存分に飲んでいることであろう。

覚林院普照静寛居士。御冥福を祈る。合掌。